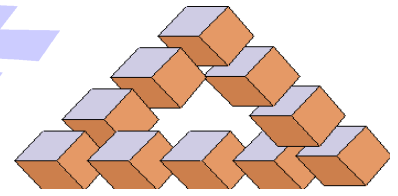


会長の御信



No. 9 H30.10.31

横浜市小学校算数教育研究会長 小林 広昭

研究主題 「数学的に考える資質・能力を育成する算数科学習」
～数学的な見方・考え方が成長する学び～

協働とは？

本年度の市算研のキャッチフレーズは、協働（コラボレーション）です。

さて、本日の市算数研究会は、12月の市算研授業研究会の指導案検討になります。指導案検討に当たっては、先月出した「表現にこだわる」を再度読んでいただきたいと思います。

昨日、送られてきた各部会の運営計画及び指導案をざっと見させていただきましたが、再度、学習指導要領の解釈について、考えてみてください。

例えば、3年生「三角形と角」の思考力・判断力・表現力等の表記は、次のようになっています。

（ア）図形を構成する要素に着目し、構成の仕方を考えるとともに、図形の性質を見だし、身の回りのものの形を図形として捉えること。

とあり、指導案の下に記述されていることは、解説書に書かれていることです。

そうではなく、「図形を構成する要素に着目し、構成の仕方を考える」とは、この学年のこの場面では、具体的に子どもの姿として、どのようなことをして、どのようなことを考えることなのかを明らかにしてほしいと思います。さらに「図形の性質を見だし、身の回りのものの形を図形として捉えること」とは、どのような子どもの姿を想定しているのでしょうか。そのことをしっかり検討しておかないと、その後のゴールを描くことができません。

他の指導案でもゴールの表記が、「求めることができた。」「説明することができた。」「式に表すことができた。」「〇〇できた。」のような知識・技能のゴールを思わせるものがありました。また、子どもの姿として描かれていない、または、子どもの言葉になっていないものもありました。ゴールが資質・能力ベースの子どもの学びの姿になっているのか、しっかり検討してほしいと考えます。

また、子どもの学びの姿としてのゴールを複数描けていないと、授業が単一的な方向に、型に拘泥した方向に向かう傾向があります。資質・能力ベースの授業づくりでは、一つのまとめで終わるものではないと考えます。そのあたりもみなさんと検討してほしいと考えます。

また、授業者、各部会の世話役の先生方は、そのゴールをしっかりと描けたこ

とを確認した上で、そこへ向かうための問いを考えてほしいと思います。どうしても授業を考える上で、本時の問題、素材、そちらを先に決めてしまった関係で、そこから抜け出せなくなってしまう傾向があります。授業者の思い入れが強ければ強いほど、準備に時間をかけてきただけ、こだわりも強くなっています。しかし、資質・能力ベースのゴールを再検討し、そこに向かうために必要な問いを考えたとき、その素材、問題場面で、子どもの思いを引き出しながら、子ども自身が問いを描くことができますか。学習の流れが、教師のやりたいことに左右され、子どもたちの思いや意図とズレていってしまっていないか。

流れそのものが、教師の思いが強く出たものになっていないか、検討してください。子どもとともに作り、子ども自身の問い、子ども自身の展開になっているのかをみなで詰めてほしいと考えます。

お互い、遠慮もあると思いますが、本当の意味での協働について、ぜひ、考えてみてください。教師自身が「自立・協働・創造」に近づこうとしていないのに、子どもたちが向かうはずがありません。ぜひとも、主体的に検討に参加し、協働して、新しい授業を創造してみてください。

時間がなかったせいで、回りくどい表現や不適切な表現もあったかもしれませんが、申し訳ありません。でも、1ヶ月後に12会場の授業が、子どもたちの学びを保証し、子どもたちの笑顔にあふれたものにしてほしい一念です。

よろしくお願ひいたします。

<この「会長の独り言」は、印刷して配付していただいてもかまいません。>